

Synopsis: Sons of the Sphinx
created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

シノプシス

1. 概要

原書名：	Sons of the Sphinx
仮邦題：	スフィンクスの息子たち
著者：	Cheryl Carpinello
出版社：	CreateSpace Independent Publishing Platform
刊行年：	2014 年 9 月
ISBN:	978-1500554934
言語：	英語
分野：	ヤングアダルト
総頁数：	182 ページ (古代エジプト地図や用語集を含む)

2. 著者略歴

シェリル・カルピネロ (Cheryl Carpinello)、アメリカ在住。以前ハイスクールで教鞭を執っていた経験を活かし、「読書が苦手」な青少年をターゲットとした小説の執筆や、ライティングワークショップに携わる。本作品は、Tales & Legends for Reluctant Readers (読書嫌いのための伝説) シリーズの第4作目である。2014年、本作品でリタラリー・クラシック賞プリティーン部門銀賞を獲得、2015年には Readers' Favorite (読者のお気に入り本) ヤングアダルト部門、および IAN ブック・オブ・ザ・イヤーヤングアダルト部門において、それぞれ最終選考まで残った。得意とする題材は、中世、アーサー王伝説、古代エジプト、古代ローマなど。

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

3. 主要登場人物の紹介

ローザ……靈感を持つ 15 歳の少女。

トゥット……古代エジプト王、トゥットアंकアメン(=ツタンカーメン)。

へセナ……トゥットアंकアメンの王妃、アンケセナーメン。

4. 内容要点

靈感を持つ 15 歳の少女ローザのもとを、ある日突然、古代エジプトの若き王トゥットアंकアメンが訪れる。王妃アンケセナーメンを探してほしいと頼れ、トゥットアंकアメンとともに古代エジプトにタイムスリップしたローザだが、いろいろな難題に直面するはめになる。そして現れたのが、破壊の神セトの邪悪な魔法を使い、死の世界にローザを引き込もうとする闇のファラオ、ホルエムヘブ。ローザはスフィンクスの息子といわれるファラオたちの名誉を回復するため、そして若き王と王妃の永遠の愛を守るため、悪に挑み、奮闘する。

5. 各章のあらすじ

第 1 章

あたしの名前はローザ、15 歳。あたしは死人と話ができる。おばあちゃんも靈感を持っていて、これは「天からの授かりもの」だと言っていたけど、あたしにとっては厄介の種。クラスメートたちはあたしを気持ち悪がって、遠ざける。今日だって、数学のテスト中に見知らぬ死人にしつこく話しかけられて、頭にきて、うっかり大声出しちゃったら、校長室に連れていかれるはめになった。

ほら、今も声が聞こえてくる。寝室にはあたししかいないのに、誰かがあたしの名を呼んでいるわ。

第 2 章

声がする方に振り向いて、息が止まりそうなくらい驚いた。あたしは

Synopsis: Sons of the Sphinx
created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

死人の声が聞こえるけど、死人の姿を見たことはない。でも、今、あたしの寝室の中に男の子が立っている。しかも、なかなかカッコいい。剃った頭に、きれいな目鼻立ち。日焼け具合もいい。ノースリーブのシャツにスカートのようなものを履いていて、エキゾチックないでたち。まさか、この人——いいえ、そんなバカな。でも、やっぱり……「あなたは、トゥットアंकアメン？」

第3章

そうだよ、ぼくを触ってみて、とトゥットが近づいてきて、あたしに手を伸ばす。肌が触れ合った瞬間、あたしの中にスパークが走る。見下ろすと、あたしの手が金色に光っている。いったい何が起こったのかわからない。あたしはどうしちゃったの？ 頭の中で声が聞こえる。「ローザ、怖がらないで。お願い、わたしに彼の顔を見させてちょうだい」と女性のやわらかい声があたしに訴える。トゥットを見上げると、彼は何かを愛しむような優しい眼差しで、あたしを見つめる。そして「アंकセナーメン」とあたしに呼びかける。

第4章

愛妻アंकセナーメンの魂の一部があたしに宿っているのだとトゥットが言う。信じられないけど、あたしの体は確かに、内側にいる別の存在を感じている。アंकセナーメンの精霊を取り戻すため、一緒に彼女の墓を探してほしい、とトゥットに懇願される。そのためには、7日以内に彼女の祖父アイを見つけて、彼女の墓が隠されている場所を聞き出さなくてはならない。しかも、アイを見つければ、闇の將軍ホルエムへの悪行を阻止し、王族に着せられた汚名を晴らすことができるらしい。あたしはトゥットを助けることを決めた。

第5章

助けるって言ったものの、7日間も家や学校から離れるなんてやっぱ

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

りできない。死人と一緒にエジプトに行ってきます、なんて誰にも言えやしない。えっ、古代のエジプトへタイムスリップ？ 映画を観に行ったパパとママが帰宅するまで、あたしも現代に戻ることができるのね？ それじゃあ、まあいいわ。そう言うやいなや、トゥトに引き寄せられ、その瞬間、ナイル河の匂いや砂漠の熱気をふと感じる。あたしの頭の中がスピンして、目の前で星がビュンビュン飛んでいく。

第6章

初めてのタイムスリップで着いたのは、トゥトが幼年期を過ごしたアケトアテン。古代の人たちには、タイムスリップしてきたあたしとトゥトの姿は見えないみたい。トゥトの父、アクエンアテン王の偉大なパレスの中で、あたしは黒髪の美少女へセナ——幼きアンケセナーメン——と5歳のトゥトに会う。二人のあとについて玉座の間に入ると、そこには黄金を身にまとったファラオと美しいネフェルティティが座っていた。この日は、父王が初めてトゥトを自分の後継ぎとして認めた、重要な日。でも突如、あたしは胸に痛みを覚える。あえぎながら邪気を感じて振り向くと、部屋の奥に男の魂が見える。その魂は不気味なオーラを放つと忽然と消えた。「將軍ホルエムヘブの魂だ」とトゥトが言う。「ここには、危ない。安全な場所を探そう」

第7章

あたしは秘密の部屋に逃げ込んで、やっと息を整えることができた。なぜ、あの男にはあたしが見えたのだろうか？ なぜ、あたしを狙ったの？ ホルエムヘブは魔力であたしたちの存在を察することができるのだとトゥトが言う。トゥトを助けるつもりでここまで来たけど、まさか危険が待っているとは思わなかった。今すぐ家に帰りたい。でも頭の中で、再びへセナの声が聞こえる。わたしたちにはあなたしかいないの、見捨てないで、って懇願している。トゥトの悲しそうな目を見て、あたしは勇気を奮い起こした。よし、ひと肌脱ごう、二人の愛のために。

第8章

とはいえ、これからどこへ行けばいいのか、わからない。トウトいわく、太陽神アテンを深く信仰した父王のアクエンアテンは、他の神を否定したと民に思われ、反感を買ったらしい。その反感をホルエムヘブが煽ったため、父王は古都テーベを放棄し、遷都せざるを得なかった。そして、王家のアテン崇拜は、祖先トトメスがスフィンクスを介して太陽神レーの声を聞いたという伝説に基づいているという。そういえば、スフィンクスの足元には碑文があるんじゃないかなかったかしら？ 糸口を求めて、あたしとトウトはスフィンクスを訪れることを決める。

第9章

再びタイムスリップして、ギザにやって来た。あたしはスフィンクスを見上げてびっくりした。だって鼻があるんだもの！ 砂に埋もれた碑文を探す中、アンケセナーメンがあたしに謎めいた言葉をつぶやく。「砂漠はつねに砂漠であり続け、偉大なファラオの砂漠もこれに同じ」 やっと掘り出した碑文にはこう記されている。「私、エジプトのファラオであるアイは、いつの日かホルエムヘブによって殺されるだろう。歴代王の尊厳を守るため、私の墓の在りかはアンケセナーメンに、そしてアンケセナーメンの墓の在りかは私のみ明かされる。この碑文を読んだ者は、私もしくはアンケセナーメンを探し出し、スフィンクスの息子であるトトメス4世、アメンホテプ3世、アクエンアテン、そしてトウトアメンの名誉を回復すべし」

突如、あたしは息ができなくなる。首が締め付けられるように苦しい。

第10章

トウトが砂に埋もれかかったあたしを引き上げてくれた。ホルエムヘブの仕業らしい。ヤツがスフィンクスの鼻を切り落とし、あたしに目

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

がけて大量の砂を巻き上げたのだ。ホルエムヘブはあたしを殺すつもりかしら。怖い、でもここでくじけるわけにいかない。

先ほど聞いたアンケセナーメンの謎めいた言葉をトゥットに伝えると、何かひらめいた様子だ。そして、あたしにも、今やっとその意味がわかった。偉大なファラオの砂漠、つまりファラオが眠る場所、それはきっと「王家の谷」を意味しているに違いない。

第 11 章

タイムスリップして、ルクソールにある王家の谷に着いた。まだ戸口を封印されたままの墳墓が目にと留まる。ここには大発見を待っている王墓があるのだと思うと、つい興奮してしまう。古代のエジプトでは、捕まえられた墓泥棒は、手を切り落とされたのだという。トゥットの表情が陰しくなる。人びとが私欲のために、王家の聖なる墓を荒らすことが許せないらしい。確かに、盗掘は醜い。でも、現代では自己利益のためではなく、研究のために王墓に立入る場合もあることをトゥットに知ってもらいたい。考古学者のハワード・カーターは、発掘の際に、敬意を持ってあなたに接したのよ、とあたしはトゥットに伝える。

第 12 章

トゥットは砂に埋まった階段を見つけた。ある墳墓に通じているようだ。あたしは一緒に砂を掘り始めるが、何かがおかしいと感じる。頭が痛むし、あたしたちが探しているのはこの墓ではない気がする。では、どの墓なの？ 不意に、頭の中に葬儀の光景が浮かぶ。いったい誰の葬儀なのだろう？ 「トゥットアンクアーメンよ。トゥットの墓に行けば、手がかりが見つかるわ」とアンケセナーメンがあたしにささやく。ここで時間を無駄にしてしまった。あたしが古代エジプトに来て、2日以上が経過した。ホルエムヘブの息子が王位を継ぐまで、あと数日。それまでにアイとアンケセナーメンの墓を探し出さないと、すべてが手遅れになってしまう。

第 13 章

あたしとトゥトは、王家の谷にあるトゥトの墳墓に来た。戸口はまだ封印されていない。腐敗臭が漂う王墓内の通路を抜けて、大きな部屋に出ると、あたしは目を見張った。目の前に金色に輝くトゥトの財宝がある。これらの副葬品は数週間前に博物館でも見た。小さな棺桶は、トゥトの胎児のものらしい。奥の玄室には、大きな黄金の祭壇があり、その前にトゥトの棺が置かれている。

第 14 章

黄金の祭壇の前に誰かが立っている。生身のアイだ。あたしたちの存在に気づかず、祭壇の前で祈りを捧げている。壁に描かれた自分の葬列の絵に見入っていたトゥトが、喜びの声を上げた。壁画の中には、棺を運ぶ人々が描かれていて、その進行方向にくねくねとした道が伸びている。「これが、アイがぼくらに残した手がかりに違いない」とトゥトが壁画の中の道を指差して、興奮気味に言う。「アイが埋葬されているのは、ここではなくて、西の谷だ」

急いで出口に向かうが、途中、トゥトが手斧を取りに王の宝物庫に引き返し、その間にアイによって戸口が閉められてしまう。どうしよう。神聖なる王家の谷ではタイムスリップができない。王墓に閉じ込められてしまった。

第 15 章

数時間経ち、夜になると、外から音が聞こえた。墓泥棒らしい。あたしたちは、男二人が戸を開け、墓の奥に消えていくのを陰から見た。先に墓の外に出るようにあたしに告げると、トゥトは墓泥棒のあとについて再び奥に入っていく。宝を目の当たりにして歓喜する男たちに、トゥトは財宝の品々を投げつける。空中を舞う宝物を見て、泥棒は一目散に逃げていった。トゥトは満足げだ。あたしたちは開け放たれた戸から

無事に外に出る。

第 16 章

外に出ると、夜明けが近づいていた。再びアンケセナーメンがあたしにささやく。「わたしがあなたたちを導いてあげるわ。でもこれが最後よ」彼女の力も限界にきたようで、声がか細い。

アンケセナーメンの力を借りて、あたしたちは数か月先にタイムスリップにする。さっきまで目の前にあったトゥットの墓への入り口が巨大な岩で覆われている。見上げると、岩や砂が落ちた痕跡がかすかにうかがえる。この痕跡は、きっとアイが意図的に残したのだろう。あたしたちはその跡に導かれるように砂の山を上り始める。

第 17 章

砂の山を上り、谷を下り、あたしたちはとうとうアイの墓の前に着いた。入り口の木戸は壊れかけていて、細いロープが掛けられている。戸口にはガラスや陶器の破片が散乱し、何者かによって荒らされたのが明らかだ。ホルエムヘブの仕業だ。墓の中の壁画はところどころ壊されていて、副葬品も残っていない。幸いにも、ひっそりと残された棺には、開けられた形跡がない。

トゥットがアイの棺に向かい、アイのバー（魂）とカー（精神）を一つにするために、開口の儀式を始める。しばらくすると、棺から魂が浮き上がり、老人の姿に変わる。ついに、トゥットとアイは再会することができた。

喜びもつかの間、通路の奥からごう音が押し寄せてきた。ホルエムヘブだ。危険を感じて、あたしは走り出す。

第 18 章

部屋を飛び出したあたしに、砕けた岩が襲いかかる。粉塵で息ができない。気を失いかけたあたしを、トゥットとアイが救い出してくれた。正

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

気を取り戻すと、ホルエムヘブへの怒りがこみ上げてきた。必ずヤツを滅ぼしてやる、とあたしは心に誓う。

アイがアンケセナーメンの墓の在りかをトゥットに打ち明ける。彼女は父王アクエンアテンの墓の奥に隠された部屋に眠っているという。あたしとトゥットは、再びアケトアテンの街へとタイムスリップする。

第 19 章

数日前に訪れたときは美しかったアケトアテンは、すでに荒涼としている。容赦なく照りつける太陽の下、あたしとトゥットはアクエンアテンの墓へと向かって岩山を上る。見下ろすと、遙か向こう、ナイル河の水辺に水蓮が咲いている。

ようやく、あたしたちは岩窟の墓の入り口を見つける。辺りにはひと気がないが、何者かの視線を感じる。ホルエムヘブに違いないが、あたしはもう恐れない。5つ並ぶ墓のうち、トゥットが指さした真ん中の墓に入っていく。

第 20 章

暗い通路を抜け、あたしとトゥットはようやくアクエンアテンの玄室を見つける。室内はひどい荒らされようだ。棺のふたは開いており、中は空だ。ホルエムヘブがファラオのミイラを取り出したのだ。怒りがこみ上げてくる。そのとき、急に、あたしの呼吸が苦しくなる。胸が締め付けられる。

振り返ると、部屋の入り口に大男が立っている。「アクエンアテンのミイラもアンケセナーメンのミイラも、このわたしが破壊させた。次はお前の番だ、ローザ」とホルエムヘブは悪魔の笑い声を上げる。

第 21 章

しかし、ホルエムヘブの笑い声はすぐに途絶えた。そこに、アイが完全な姿で現れたからだ。逆上したホルエムヘブは、あたしの腕を掴ん

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

で、外へと引きずっていく。「お前がいなければ、アイが見つけれられることはなかった」とあたしを何度も岩壁に叩きつける。あたしの悲鳴とホルエムヘブの笑い声が混ざり合う。

「やめなさい！」と突然、あたしの中のアンケセナーメンが叫んだ。アイとトゥットも追いつき、その背後からアテン、アムン、そしてレーの神官が現れる。そして、神官らが光線を放ちながらホルエムヘブを囲み、経を唱えると、破壊の神セトの魂はホルエムヘブの体から抜け出して消えた。セトの魂が抜けたホルエムヘブは、神官からラムゼスに王位を引き渡すことを命じられる。

第 22 章

ホルエムヘブは去り、そして神官たちも姿を消した。アイはアクエンアテン王の空の棺の前にひざまつき、床のがれきの下を掘り始める。すると、周囲がガタガタと動き出し、壁が崩れ、ピンク色の棺が現れた。トゥットがあたしを呼び寄せる。あたしの中に宿る彼女の魂を送り込むため、彼女の棺を抱きしめてほしいという。言われるがまま、棺を両腕で囲んで目を閉じると、あたしの頭から何かが浮かび上がった。目を開けると、トゥットの横に美しい王妃が立っている。

これですべてが終わり、とうとう別れの時が来た。あたしの助けがなければ、スフィンクスの息子であるファラオたちの名誉を取り戻すことも、愛を救うこともできなかった、とトゥットが礼を言う。そして、ヘセナが着けていた金のチェーンをあたしの首に掛けてくれる。あたしは初めて、自分の靈感が「天からの授かりもの」であると心から思えた。最後のタイムスリップは一人旅だ。トゥットがあたしの唇に別れのキスをすると、古代エジプトの景色がぐるぐると回り出した。

6. 本書の特徴

読者ターゲット：主人公が 15 歳の女の子ということで、想定読者層もプレティーンおよびティーンの 10～15 歳くらいであろう。

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

文体:平易な口語体。典型的なティーンエイジャーの語彙や間投詞が多く、コミカルなタッチで書かれている。

訳の難易度:原書の文体は平易だが、ティーンエイジャー特有の表現や慣用語などが頻出するため、訳する際でも多くの工夫が必要だ。意味を正確に理解するのは無論だが、情景や心情を頭の中で描いたうえで、適切かつ自然な日本語で表わさなくてはならない。また、時代背景、歴史上の人物、および古代エジプトの神々や概念についての入念な下調べは必須である。

感想・分析:

本書は、ただのヤングアダルト向けの本ではない。読書が苦手なプレティーンおよびティーンを想定読者として書かれたもので、文学を遠ざける傾向の若い世代を惹きつけようという著者の努力が実を結んだ作品となっている。全体において、著者の意図はわかりやすい。題材とキャラクター設定においては特にそうだ。

主人公は15歳の女の子、ローザ。死者と話ができるという不気味な特技を持っているが、暗さのない、さっぱりしたキャラクターだ。冒頭では、数学のテスト中に絡んできた死人と口論になり、挙げ句の果てには教室を追い出され、校長室で絞られるという始末。主人公は、コミカルでありながら、少し読者の同情をそそるタイプなのだ。心情も現代のティーンらしい語彙で描写されており、同年代の読者は感情移入しやすいだろう。

ふつうの高校生の陰を往くようなローザを、かのツタンカーメンが訪れるところから物語は本筋に入っていく。古代エジプトのファラオであったツタンカーメンは、悲劇の少年王として知られており、主人公や想定読者層とも同年代だ。若き王、タイムスリップ、そして淡いロマンスと、中高生うけしそうなモチーフが凝縮したストーリーは、教育者で

Synopsis: Sons of the Sphinx

created on 10 Feb.2019 by Y.Takeshima-Recker

あった著者の経験から生まれたものであろう。当初、「読書が苦手な若者向け」と聞いて、内容の浅い読み物を期待していたが、読み始めると、エジプト文明について学び得ることも多く、著者が古代エジプト史に精通していることがうかがえる。ツタンカーメンが墓泥棒を脅かすために宝石を投げつける場面、そして盗掘行為を批難し、死者への敬意を示すローザの言動は興味深い。平易で読みやすい文体、軽快な展開、有益な情報やモラルを含んだ内容、と全体的に均衡が取れている。このためか、原書出版国であるアメリカでの評価はよく、読者層もティーンエイジャーを持つ親までと幅が広がっているようだ。ツタンカーメンは、現在でも研究者によって調査が行われており、その名が広く知られているので、日本の若い読者にも受け入れられやすいと思われる。

本文で実存したファラオが多く登場するが、3000年以上前の人物ということで、その実像は専門家のあいだでもはっきりわかっていない。各人物には多数の説や逸話があるが、著者はその中でももっともらしい説をもとにキャラクター作りをしたように見うける。ただ、ツタンカーメン時代の将軍で、のちに王位に就いたホルエムヘブが本作品では闇のファラオとして描かれている点は、ファンタジー色がやや濃すぎるように感じた。とはいえ、これは読む側（非ティーンエイジャーである、この分析の筆者）の好みの問題でもあり、ティーンを目からすれば、やはりこのような悪人がいたほうが、スリルが増すのであろう。